

京都大学	博士(文学)	氏名	小鹿原 敏 夫
論文題目	ロドリゲス日本大文典の研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>イエズス会士ジョアン・ロドリゲス (1561 頃～1633) の著書『日本大文典』(長崎刊 1604) と『日本小文典』(マカオ刊 1620) は大航海時代に世界各地で出版された宣教師文典のなかでも白眉とされる。ロドリゲスをはじめとする日本イエズス会士たちはラテン語の知識をもち、西欧近世の諸言語に関する文法知識を備え、日本語の記述に臨んだ。彼らの日本語研究には限界もあったが、動詞活用論などでは同時代の日本人たちよりも先に進んでいた。彼らの日本語研究は鎖国下の日本では忘れ去られてしまったが、西欧では二百年を経て、パリのアジア学会から『日本小文典』(以下小文典と略す) の仏訳 (1825) が刊行された。そして日本イエズス会の日本語研究は日本語を研究するための基本的枠組みとなった。</p> <p>日本では土井忠生博士による画期的な邦訳が 1955 年に出版されたことで『日本大文典』(以下大文典と略す) は室町時代の日本語の基礎的な言語資料として広く利用されるようになった。しかしながら大文典の成立過程に関してはまだ研究の余地が多く残されていると思われる。大文典はラテン文典を雛形にしているが、イエズス会士たちは無理をおかしてラテン文典の枠を日本語に押し付けていない。それではどのような方法で日本語の文法を整理し体系性を維持しようとしたのであろうか。全七章からなる本論文はその疑問に答えようとする試みである。</p> <p>第一章：大文典を大航海時代の宣教師文典のひとつとして位置づけ、同時代の宣教師文典の成立に影響を与えたと考えられるラテン文典(思弁文法、ネブリハ、アルヴァレスのラテン文典) を概説し、補説としてロドリゲスの小文典と大文典との関係を論じた。</p> <p>第二章：大文典はアルヴァレスのラテン文典 (1572) に倣った三巻構成をとる。巻 I では名詞や動詞の活用、巻 II では品詞論、統語論などアルヴァレスの文典にある項目をおおむね踏襲しているが、巻 III は日本語に特有の書簡の書き方や文化的な背景の説明に費やしている。本章では大文典巻 I・II にみられる品詞分類と名詞、動詞の活用がどのようにラテン文典の枠組みを使って組み立てられたのかを述べ、さらにそれに加えてイエズス会士たちは日本語の文法事実の体系的な整理のために様々な創意工夫を試みたことを指摘した。その一つの例として「主語」の概念が導入されたことを指摘した。これはルネッサンスの実用ラテン文典からの受容ではなく、中世末期 (十三世紀) に起こった思弁文法学からの摂取であると考えられる。しかしながらロドリゲスは大文典において「主語」の概念を使いあぐねたようで、小文典においては逆に</p>			

「主語」の語を削除しようとしていることも指摘した。

第三章：大文典において動詞の「語根」とは「読み」「思ひ」など国文法では連用形に対応するものである。このように動詞を語根と活用語尾に分解するのは画期的なことであった。実は「語」を語根と接辞に分解して捉えるのはギリシア・ラテン文典の伝統ではなく、ヘブライ語、アラビア語のものであった。大文典の「語根」の概念はキリスト教徒が十六世紀に再発見したヘブライ語、アラビア語文法から直接受容されたものである可能性もある。しかし本章ではむしろそれは同時代のスペインによって征服された新エスパーニャの現地語（ナワトル語、タラスコ語）に関する文典からの影響である可能性が高いことを指摘した。これらの文典は、新エスパーニャ征服(1519-21)の後、いち早く現地に上陸したフランシスコ会士たちによって大文典に先行して編まれた。そこでは動詞の活用を語尾の屈折によってではなく、語根とそれに接続する接辞という形で記述するという特徴があった。

第四章：ロドリゲスはラテン文典から動詞の範疇として能動動詞、受動動詞、中性動詞、共通動詞を導入した。しかし大文典のなかの「中性動詞」は、規範としていたアルヴァレス、ネブリハのラテン文典が定義する中性動詞と大きく異なっている。ロドリゲスは日本語の形容詞を中性動詞に分類しているのである。ラテン文典においては伝統的に形容詞は名詞の一部とみなされる。ロドリゲスが日本語の形容詞を動詞と分類するのならば、ラテン文典の枠組みのなかでそれを整理する必要があったと考えられる。そしてその目的で中性動詞の下位分類に形容中性動詞を設定したとみられる。さらにこの分類を導入するにあたってロドリゲスはネブリハのラテン文典の欄外註釈にみつけた中性動詞の定義を利用したことを明らかにした。

第五章：大文典においてロドリゲスは日本語動詞の叙法のひとつとして接続法をあげるが、前半では「条件的接続法」（仮定表現「もしも～ば」等）を接続法の下位分類として定義している。しかし後半では「条件的接続法」を「条件法」として接続法から独立させている。この独立した「条件法」は小文典にも受け継がれた。ロドリゲスが自ら観察した日本語の事実即した文法記述をラテン文典の規範よりも優先した一例と考えられる。

第六章：大文典の巻Ⅱに展開されている統語論は、アルヴァレスのラテン文典を踏襲し、*construçam intransitiva* と *construçam transitiva* とに二分されている。邦訳大文典（1955）において、土井博士は前者を各品詞が文を構成するのに先行語とは同じ格をとる「同格構成」と、後者を先行語とは異なる格をとる「異格構成」と訳している。本章ではこの二つの統語上の構成はアルヴァレスが中世思弁文法の統語論から例外的に取り入れた用語であることを指摘した。これは思弁文法家が重視する文中の二項的な単語関係に基づく統語論を前提にし、名詞の形で表れる「それ自体で存在するもの」が、一つであるか二つであるかを区別したものである。したがって *construçam intransitiva* と、*construçam transitiva* はそれぞれ「単名詞構成」と

「複名詞構成」と訳すべきであると結論づけた。

第七章：大文典の書誌学的側面を論じた。同書は全世界で二部が現存する。英オックスフォード大ボードレイアン図書館蔵とスコットランドのクロフォード家本である。筆者はボードレイアン本はだけでなく、クロフォード卿の許可を得て、その家本の閲覧調査も行った。その結果、ボードレイアン蔵本では不鮮明な印刷部分や書き込みの有無を確認することができた。またクロフォード家本の来歴についての調査を行った。そして同本の伝来にはまだ未知の部分があることを指摘した。

(論文審査の結果の要旨)

J. ロドリゲス (1561~1633) の著した「日本大文典」(1604年)と「日本小文典」(1620年)は、宣教師達がラテン語文法の枠組みによって日本語を分析した貴重な資料である。大文典は長崎で、それまでのバテレン達の研究を利用しながら編纂されたものであり、小文典は、禁教後、マカオに移住してから大文典を簡潔に纏めたものである。

大文典の構成は、当時のラテン文典に基づいているが、ラテン語文法と日本語文法の違いをどのように捉えていたのか、日本語特有の言語現象をどのように処理しているのかという点についてはほとんど研究されてこなかった。筆者は、大文典の中の、ラテン文典とは異なった分類、あるいは整合性の無い術語を通じて、ロドリゲスがどのようにラテン文法の枠に従い、あるいはその枠を越えていったかという点を明らかにした。

第一章では、大航海時代、宣教師達が新しい地域での布教に伴って、現地の言葉に関する文典を編纂したが、大文典をその中の一つとして位置づけた。この視点から大文典を見ることによって、各地の現地語文典の相互の影響関係も研究の視野に入った。また、当時のラテン文典(思弁文法、ネブリハ、アルヴァレスのラテン文典)の概説も有用である。

第二章は、大文典とアルヴァレスのラテン文典(1572年)の構成の相違点を指摘し、その上で当時のラテン語文法では用いられない「主語」という用語が思弁文法からきたものであり、先輩のバテレン達が用いていた用語を踏襲したものであろうとする。それは、ロドリゲス自身がこの概念を「主格」と明瞭に区別できていなかったこと、後の小文典では「主語」の用語を削ろうとしていることから推測できるとした。思弁文法との関連や「主語」と「主格」の違いなど、これまで問題にもされなかった点を明らかにしてゆく手際は見事である。

第三章では、当時のラテン文法では単語全体を一語と理解し、「語根+接辞」という分析は行っていなかった。ロドリゲスは不完全ながら、「語根」という概念を導入しているが、フランシスコ会が新エスパーニャ征服(1519-21)に伴って編纂した、ナワトル語とタラスコ語の文典の影響である可能性が強いとする。

第四章では、形容詞を、中性動詞の下位区分の「形容中性動詞」と分類していることが、ロドリゲスの工夫であると指摘する。ロドリゲスは中性動詞を3分類しているが、それは当時のラテン語文法と違っている。筆者はネブリハの文典の原典を渉猟し、その欄外にネブリハの手になるものと思われる、古いラテン文典の3分類法の注記に気付いた。その例文には大文典と共通した単語が用いられており、ロドリゲスが日本語の形容詞の分類のために、この古い3分類を利用したことが明らかになった。筆者が、何度も欧州各地の文庫を訪れ、原典に当たってゆくことによって得られた基礎的、実証的成果である。

第五章では、ラテン文典では叙法を直説法以下7種に分類するが、ロドリゲスは、

その中の一つ、接続法を5種に分け、丁寧な解説を加えている。これは日本語の接続法が、ラテン語に比べて複雑であったために、ラテン語文法の枠内で整理するためには接続法の下に押し込めるしかなかったとする。そしてこの分類は大文典の後半から、独立した「条件法」として大分類に加えられ、それは小文典にも受け継がれている点を指摘する。これもこれまでまったく指摘されることがなかったロドリゲスの工夫である。

第六章では、統語論の中で、*construçam intransitiva* と *construçam transitiva* という用語が、「同格構成」「異格構成」と翻訳されているが、「単名詞構成」「複名詞構成」という訳語の方が実態にあっているとす。思弁文法においては「哲学の本」のような名詞どうしの関係において、どちらかの一つの名詞が実体名詞である場合は *intransitiva*、二つとも実体名詞である場合には *transitiva* と分類されていること、動詞の場合には目的語を取るか取らないかを基準としていることを明らかにし、共に、実体名詞が一つか二つかという点が基準になっているので、「単名詞」「複名詞」と訳すのが良いとする。これまで誰も疑問を持たなかった訳語の不備を突く好論である。第七章は、大文典は世界で二本しか確認されていないが、その一本であるクロフォード家本の調査報告である。筆者がクロフォード卿の許可を得て、調査結果を報告したのは貴重な情報となった。

以上のように、本論文は、ラテン文典の歴史、思弁文法との関わりを追究することによって、大文典の日本語文法解釈がどのような点でラテン文典の枠組みと相違しているか、日本語特有の現象をどのようにしてラテン文典の枠内で処理したのか、更にどうしてもラテン文典の枠を破らざるを得なかったものは何かを明らかにし、これまで誰も気付かなかった多くの問題を解決している。ただ、未だ体系的な記述にはなっていない点が気になるが、このような細部を積み上げてゆくことによって、ロドリゲスの理解した日本語文法の体系が明らかになることが期待される。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2013年2月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。